

■立原道造 詩人であり、建築家という稀有な存在。大学卒業記念に詩集を刊行、第一回{中原中也賞}を受賞決定直後に夭折。

たちはらみちぞう

第一次大戦始1914＝東京の日本橋橋町で、荷造用製箱業立原貞治郎・トメの次男に生まれる。立原姓は母方で、立原翠軒・杏所の末裔に当る。

木造二階建て屋根裏付の町屋で、木箱製造の音を聴きながら育つが、

ベネチア条約・1919＝5歳：父が死去。名目上、家督を相続し、{立原道造商店}になるが、家業は母が取り仕切る。

原敬首相暗殺1921＝ 7歳：幼稚園から東京市久松尋常小学校に入学、

関東大震災・1923＝9歳：震災で、生家が焼失。千葉県葛飾の親戚の家に疎開後、橘町の仮建築に戻り、護憲三派圧勝1924＝10歳：高校卒業まで、御岳山での避暑を恒例とし、

金融恐慌・・・1927＝13歳：首席を通して卒業し、府立第三中学校に入学。絵画部に所属して、パステル画で抜群の才能を示し、また、友人の影響で、天文学に熱中、物干台で天体観測に耽る。

共産党事件・1928＝14歳：国語教師で歌人の橘宗利の指導で短歌を始め、紹介されて北原白秋に面会し、以後、研鑽。学友会誌に口語自由律の“生活詠”を発表、

世界恐慌・1929=15歳：土地区画整理で周囲が一変してしまうなか、ようやく、本建築が完成。母に大学進学を意志を告げ、家業は、弟が継ぐことになった。自選の歌集「葛飾集」「両国閑吟集」・詩集「水晶簾」をノートにまとめ、

満州事変・・1931=17歳：4年で修了して、*第一高等学校理科甲類に入学。一高短歌会会員になり、前田夕暮の[詩歌]に属して投稿。学生会誌に物語「あひみでののちの」を発表し、一高文壇の寵児となる。堀辰雄の知遇を得、以後、兄事。

五一五事件・1932=18歳：同人誌『こかげ』を創刊。一文芸部編集委員に選ばれ、杉浦明平ら上級生に伍して活躍。三好達治の『南窗集』に触発され、指示性・特定性の強い短歌から、言語作品そのものの詩に転じ、手書き詩集『さふらん』、
 国連脱盟脱退1933=19歳：手書き詩集『日曜日』や『散歩詩集』などを編んだ。母から、美術学校受験を反対され、友人の勧めで、

帝人疑獄事件1934=20歳：*東京帝国大学建築学科に入学。自室を、12畳の屋根裏に移して、細々と工作しながら、起居。バシュールの言うように、まさに、建築することの夢に誘う空間になった。同志と{偽画}を創刊し、堀・三好らの第2次(四季)に参加すると、組詩「村ぐらし」「詩は」を発表して、詩壇に登場。以後、{四季}を舞台に、ソネットを発表し続ける。夏季休暇で、第二の故郷になる軽井沢を初めて訪問、堀は不在であったが、彼の師室生屋星を訪ねて面識を得て感激、本陣永楽屋の孫娘に出会って片恋したこともあり、以後、毎年、行儀追分油屋旅館を定宿に軽井沢通い、その空間からも影響を受ける。[IMPERIAL AUDITORIUM]「温泉旅館」設計。

芥川直木賞始1935=21歳：「小住宅」設計で「辰野金吾賞」を受ける。親友杉浦明平・寺田透らと「未成年」を創刊し、「コギト」など諸誌にも発表。「三色旗アパート」設計・軽井沢では、浅間山の噴火に遭遇。室生犀星が刊行した「犀星隨筆」のなかでも、数年前に、軽井沢の別荘と、馬込の自宅を、自ら基本設計して建てたことに語る「家」に触発され、二六六事件・1936=22歳：「シュトルム短篇集」林檎みの項」訳出し、処女出版。「デパートメント・ストア」設計で、再び「辰野金吾賞」。友人に、「建築家であることは自分の半身である」と語り、エッセイ「建築衛生学と建築装飾意匠に就いての小さい感想」を書き、建築同窓会機関誌「建築」再刊1号に、「住宅・エッセイ」を発表。建築論の核心に、「美」ではなく、「住=人生」を置いている。堀のために「SOMMERHAUS」を設計するも、工事金額が収まらず、廃案。建築と文学の関係を根源的に省察した卒業論文「方法論」を提出。

日 中戦争始・1937=23歳：同窓が次々召集されるなか、徴兵検査で内種不合格。◆卒業設計「浅間山麓に位する芸術家コロニーの建築群」も「辰野金吾賞」になり、建築での才能も抜群であった。卒業記念に自装の第1詩集「草堂」に寄すを刊行して、石本建築事務所に就職。「豊田氏山荘」、信濃追分「詩人クラブ」設計も実現にまでなかったが、精魂傾けた「横須賀海仁会病院（現・聖ヨゼフ病院）」が実現。手づくり詩集「ゆふすげびとの歌」を制作。ふるさとが欲しいと、浦和の別所沼のほとりに、小別荘「ヒヤシンスハウス（風信子荘）」を建てようとして設計と始めるが、中断。肋膜炎を発症して療養中、油屋が、隣家の火事で全焼。九死に一生。自装で第2詩集「暁と夕の詩」刊行。

健保+総動員 1938=24歳：「個人的に、一高文芸部先輩のために設計した「秋元邸」が唯一の竣工物件。屋根裏の自室に洋酒のボトルを飾り、「バウ・コペン・ハーゲン」と自称、ソネット「私のかへって来るのははじめ、この空間を語る作品も多い。水戸部アサイと愛し合うようになる。肺尖カタルを発症して再度休職、前年に引き続き、夏季に犀星一家が軽井沢に避暑する間、留守番として、馬込の住宅に起居。第3詩集「憂しき歌」、同人誌「午前」を構想するが、未刊。その後、療養のため、山形、盛岡方面に長期滞在、さらに、転地療養で、京都から長崎方面に滞在中、発熱・咯血し、東京に搬送され、事務所に戻帰することなく、江古田の東京市立療養所入り、婚約者アサイの手厚い看護を受けながら、ノートに綴った「盛岡紀行」「長崎紀行」に文学的達成を見るも、

第二次大戦始1939=25歳：*第2詩集『暁と夕の詩』が、第1回中原中也賞受賞決定直後、病状が急変して、没した。没後、詩集『優しき歌』、物語集『鮎の歌』が刊行された。詩作品には、建築家ならではの、構成があり、それが、独自の美にしていることを、のちに、萩原朔太郎らが指摘している。